



富山妙子

画家・富山妙子(1921-2021)の著書『アジアを抱く 画家人生 記憶と夢』(2009)を読み、彼女の並々ならぬ行動力、命を求める美意識に深く感動しました。「はじめに」と題する文の中に **赤い夕陽** という言葉があります。

夕暮れになると、太陽が灼熱の鉱炉から噴出したような赤い玉のように輝いた。空も大地も夕映えに赫々と染めあげる太陽が、刻一刻と地平線の果てに没してゆくとき、私は自然の壮大さに息を呑む思いだった。その赤い夕陽の美しさは、15年間つづく戦争の記憶と重なって、いつしかわたしの心象風景ともなっていた。(南満州鉄道 車窓からの風景)

富山妙子は1921年、神戸郊外の御影に生まれ、「満州国建国宣言」が宣布された1934年に、父親の仕事の関係で満州へと移り住みました。女学校に入ったときから、画家になりたいと願うようになり、日中戦争が始まった翌年の1938年、東京の女子美術学校へ入学しました。時は軍国主義が色濃く、民族、階級、性差の身分の違いのある差別の時代です。学校では19世紀そのままのアカデミズムで、自由な表現は認められず、彼女はドイツの美術運動「バウハウス」の教育に魅かれ、学校をやめ、運動に加わります。シュールレアリスム、欧州の前衛美術に共感を覚えますが、運動はファシズムの嵐の中に立ち行かなくなり、消えていきます。求められて結婚し、出産し、離婚して、シングルマザーとなりますが、画家として、自分の表現したい美を求め続けていきました。

彼女は児童向け出版物の挿絵からの創作活動をスタートします。石井桃子を訪ねた時に、細倉亜鉛鉱山の、草木を枯らし荒涼とした山肌の、茶褐色の風景と、その深い闇の地底で働く労働者の生きる姿を見て、美しい！と感動しました。ひたすら西洋近代を手本としてヨーロッパ的な絵を描こうとしてきたそれまでの自分と決別しました。彼女は炭鉱など、底辺で働かざるを得ない人々への関心に突き動かされていきます。炭鉱移民を訪ね、南米に渡航した折、船上で沖縄からの移民、アジア人亡命者に出会い、黒人差別の西洋文化を目の当たりにします。サンパウロで、アーティストに主張や明確な思想があること、政治的であることが当然とされ、彼女は初めて認められました。



南太平洋の海底で

『silenced by history』より

彼女は戦争と革命の激動の時代・20世紀を生き、しかも満州で特権を味わった日本人としての責任に苦しみます。そこから、日本人として、中国人、朝鮮人への戦争責任を問う作品を制作するようになります。

私は彼女の画集、『silenced by history』、『蛭子(ひるこ)と傀儡子(くわいご) 旅芸人の物語(DVD付)]を見ました。

表現の根底にあるのは戦争によって、殺され、凌辱された中国人、朝鮮人、また日本人の悲しい姿を悼み、死んで、沈黙させられたままの魂を慰めたいという思いです。戦争犯罪を問いつつ、戦争犠牲者へのレクイエムとして、神話や物語の文化的伝統を共有する同じアジア人として、表現しています。

彼女は、**満州**といえ**ば思い出す赤い夕陽は、戦死した兵隊の血の色だったのだろうか。**と、吐露しています。彼女の誠実でありながら、自由で、熱情的な芸術家の魂に揺さぶられます。